

たしかに嘘ではない。二十代の後半にフェミと出会えて良かったと思う。当時は趣味でやっていたフェミのお勉強が、今はお仕事になっていく。気持ちいい日常生活をおくっている。しかし、本当に私は「女らしさ」にノーと言える私になれたのか？」

いやいや、なかなか。ジェンダー恐るべし、なのである。わたしは今、もう一度内面化している「女らしさ」と闘う必要を感じている。それは、老化とジェンダーの問題である。自分のなかにある「老人嫌悪」、エイジズム(年齢差別、高齢者差別)に気づきびつくりする。

美と若さにこだわる自分。「社会を変えることはできない」と悲観的になる自分……。去年、急死したり、病気になる友人が相次いだ。また、新しい分野に挑戦し着々と実績を積み重ねている同世代もいる。がんばろうと思う一方、わたしの気分は「女子には、一回競争をしたくないと思えば、いくらでも競争から逃れる方法があります」(『オンナらしさ入門(笑)』小倉千加子)で、闘うことから降りたがっている。

これらの自分と「女らしさ」がどうかからんでいるのか。ポーポワールもベティ・フリーダンも上野千鶴子も「老い」に取り組んでいる……と思えば気が楽で、♪わたしの未来はイケイケ、ゴーゴー♪なのかもしれないが……。まずは、老化を受け入れるところから始めなければと思っ

## 第15回

## S e G M の 本 棚

### 「性教育が深まる本」 —ビギナーのための20の講話と1つの対談—

村瀬 幸治著／1999年7月 十月舎

まえがきの中に、「これまでの性の教育、学習を支えていた学問は生理学、医学、産科学だったといえるでしょうが、これでは(これだけでは)“援助交際”という買売春や性暴力やエイズの問題などに正面から立ち向かっていけません。また、避妊の知識を正確に理解したとしても相手との関係の中で実行する(させる)力には直結しません。

つまりこれからの性の教育は、学習は従来の諸科学をベースにして、さらに社会学や法律学、あるいはジェンダーや人間関係論、加えて女性学、男性学などの学問を取り込むことによって、初めて現代を生きる力、自己決定の力を育てる道が開かれると考えられます。」

すべて書いてあると思いましたが、本文では、ていねに、わかりやすく援助交際、エイズ、性暴力など、講話ごとに読みやすくまとめてあります。

わたしは、なぜか、結婚、妊娠(自然)、出産、子育てのすべては、女に生まれたら当たり前と思って長く生きていました。周りを見ると、当たり前のように子どもを産んだ人もいますが、伯母二人は、結婚はしましたが出産はしていません。叔父は結婚をして養子を育てました。結婚、出産もしなかった人もいます。不妊治療や排卵誘発剤の投与で出産した人もいます。流産、死産で産めなかった人も、里親になり子育てをした人もいます。

だれもが子どもを産める、もてるという前提で「生殖」について扱ってきている、その教育の中に、居たからなのだと気付かされました。改めて、“産む、産まない、産めない”人生を再考する機会になりました。

内田 とも子